九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

口頭伝承 : 伊良原の言い伝え

松原, 孝俊
九州大学韓国研究センター : 教授

https://hdl.handle.net/2324/17966

出版情報：伊良原 : 民俗文化財の調査. 143, pp.131-168, 1999-03-31. 福岡県教育委員会
バージョン：
権利関係：

第7章　口頭伝承―伊良原の言い伝え

第1節　言い伝え

(1) はじめに

伊良原ダムが完成した日から、伊良原の民俗に次のページはない。

二十世紀が終幕を迎えるこの時期、不思議なことに伊良原は静謐な景観を保ったままである。1960年代から始まった日本の高度経済成長や、1980年代後半のバブル景気などが、ここ伊良原ではどこか見知らぬ国の出来事であるかのようである。高層ビルやマンションのような都市的景観も、観光産業が作り出したテーマパークもペンションなども、ここ伊良原に皆無であるが、そればかりが理由ではない。

1960年代にサラリーマン型社会になり、若者が都市へ流出した後、加えて出生率の低下、高年齢化の進展によって、伊良原地区は、他の日本の山村がそうであるように、高齢者の多い地域となっている。

〈事例〉　伊良原ダム建設は今なお計画段階にあるだけに、その水没移転地域が流動的であるとしても、92戸の水没戸数（平成3年9月）の世帯一覧表から見出せる世帯類型は、①多核世帯、②拡大世帯、③核家族世帯、④独居世帯、⑤夫婦世帯、⑥その他である。

その内訳は夫婦世帯が24％ともっとも多く、次に独居世帯と拡大世帯が各22％、核家族世帯が18％、その他が8％、多核世帯が6％を占めている。独居世帯にしても、都市のようにアパートに居住する若者の一人暮らしではなく、老夫婦の配偶者いずれかが死別したものであり、その平均年齢は73.3歳である。夫婦世帯にしてもその平均年齢は69.8歳である。(『犀川町(伊良原地区）山村等活性化ビジョン等』伊良原活性化協議会、平成9年、29頁、但し一部改稿)

それゆえに1998年に大ヒットした「タイタニック」や、また同年に若者たちが熱狂したロックグループ「X-Japan」やアイドルグループ「Speed」の存在など、都会の喧噪の中で消費されていく風俗や世相やファッションの激動する流れは、ここ伊良原にどのような影響を与えたのであろうか。

またインターネットを利用した世界への情報発信や、宇宙衛星を通じて刻々と移りゆくドルの値動き、経済のグローバル化の波、ヘッジ・ファンドなどの投機筋に揺り動かされる国際金融市場、国際通貨基金（ＩＭＦ）の威信低下、そしてアメリカをも巻き込んだ世界同時金融危機への懸念なども、この伊良原は、どのように連動したのであろうか。

〈事例〉　平成10年度の犯罪件数は、屋外での自動販売機荒らしや車上荒らしが6件、物損交通事故が9件発生した。(伊良原駐在所調べ)

さらに伊良原の静謐さを物語るものとして、次の犯罪データを示すだけでよいだろう。

この数年に限っても、時代状況を照射する象徴的事件と言える、1995年のオウム・サリン事件、1997年の神戸少年連続事件、1998年の和歌山・毒入りカレーによる無差別殺人事件などの非日常

的な凶悪事件が日本で相続いたが、この伊良原でも話の種となった。しかし、テレビの朝のモーニングショーが連日大量に情報を提供したものの、人々の関心事は日常の農作業に向けられていたという。容疑者が逮捕された今、その容疑者らの個人的資質に「反社会性」を求めて、彼らを非難しながらも、毎日の暮らしに変化はなかった。

(2) ある老夫婦の言い伝え

80歳に近いA女が「一度も、伊良原を出たことがないので、ちっともおもろうね」とつぶやいたのは、印象的であった。

〈事例〉　私は東京に行ったこともなければ、新幹線に乗った経験もなく、飛行機での海外旅行体験もない。末っ子一家の住む福岡が最も遠い所に旅行した所である。帆柱から伊良原に嫁入りしてからの約60年間、朝から夜まで一年中農作業に明け暮れ、その傍ら子供を育て、家事を担当し、舅のご機嫌を伺わなくてはならなかった彼女にとって、毎日のくり返しが精一杯の生活であった。1950年代、伊良原の新婚旅行先の多くは別府温泉であったが、1930年代に結婚した彼女には、新婚旅行に行くなど想像もできなかった。嫁入り直後に夫を出征させ、十年近く夫の帰りを待ち続けた彼女の行動範囲は当然ごく狭かった。敗戦後の混乱した社会の中で必死に生き抜いた彼女は、物資欠乏の中でも小倉の闇市などにいかなかった。

敗戦直後の社会的動乱期を乗り越えて、耐乏生活をうち勝った自信があるのであろうか、それとも諦念でもって運命を甘受せざるを得ないというのであろうか、A女は「そうするしかなかった」とつぶやく。

〈事例〉　大正三年生まれのA女の夫・B男にしても、彼の唯一のドラマは兵隊時代である。1935年からの10年間、彼は小倉北方に駐屯していた野戦重砲五連隊に二等兵で徴兵され、新兵訓練を受けた後、中国各地を転戦した。主に「中支」(現在の中国揚子江付近) の長沙付近で戦闘に従事したが、京都郡から38名の戦友とともに出征した彼は、敗戦とともに日本に復員したときに、生きて帰還した者はわずか3名であった。伊良原からともに出征した戦友は4名であったが、そのうち2名は即日帰郷をし、残りの1名も幸いに生きて復員した。とにかく兵隊時代の思い出を語るときには、誰しも饒舌になるが、彼も同様である。一日30㎞の苦しき行軍やら、食糧難の中でのひもじさ、上官に殴られ続けた新兵時代などは、語るに尽きせぬ思い出である。
彼は、漫才師の品川捨丸師匠が慰問団の一員として、中支を巡回したときに流行した「かわいい『さまちゃん』(恋人)」を今でも30番まで、約35分間にわたって歌い続けることも出来るのである。

すでに55年経過しているのにも拘わらず、また現在まで家族の誰一人としてその歌を聴きたいとせがんだ者さえいないので、その間初めて歌ったと照れつつ、である。この超人的な記憶力の源泉がどこにあるのかと考えざるをえないが、うち続く戦闘の中で戦友が無惨にも死んでいく精神の極限状態の中で覚えただけに、それはB男の終生忘れ得ない財産であろう。

〈事例〉　伊良原では、赤紙（召集令状）は伊良原村役場の職員が配達して歩いた。

「歴戦の皇軍兵士」であった彼が中国大陸行軍中を除けば、この夫婦は伊良原を取り巻く同心円的世界の中でその大半の生涯を暮らしてきたといえよう。したがって二人の話題は伊良原の地と無関係であるはずはなく、小作人暮らしの中で、夢かなわないままに青年時代を過ごした記憶、父親とは幼くして死別したので、手元不如意なままに羽振り良い家をうらやましかったことなど、語りは留まることがない。

(3) 小作人の話

江戸時代には「四公六民」とか「五公五民」と言われた小作人の年貢米は、昭和初期にはどうであっただろうか。

〈事例〉　昔、伊良原の地主といえば、荒巻家や永沼家、大滝家、鈴木家などがあげられる。鈴木家などは「モウガを牛馬に引っかけて出られる家」と呼ぶほどに、財力があった。毎年、一反で5～6俵収穫できたとき、それから小作人は地主に対して3俵を差し出さなくてはならなかった。(昭和10年代はじめ)

小作人暮らしの貧窮の中でも、彼の楽しみの一つが浄瑠璃語りであった

(4) 浄瑠璃語り

〈事例〉　敗戦前、春と秋の二回、本式の三味線弾きと浄瑠璃語りが伊良原にきて、高木神社の境内や伊良原小学校の運動場で「太閤記十段目」(『絵本太閤記』か）などを演じていた。そのときには、村の人々が重箱にお弁当を詰めて、楽しみにその興行を観覧した。

(5) テレビを買う

ところでC男（大正初めに出生）の手帳には、人生の軌跡が克明に記入されている。几帳面な性格の人であるので、彼の身辺雑事を年毎に、日毎に綿密に記述しながら備忘録としている。その一部を紹介するだけでも、彼の人生が決して平坦なものでなかったこと、家庭内の家財道具の推移を知ることが出来、伊良原の平均的家庭の変貌していく様子を確認できるだろう。

〈事例〉
昭和2年　：仏壇を買う。本家より分家。
昭和15年春　：新宅に転居。
昭和15年5月　：シナ事変に出る。大東亜戦争中はビルマに出征。

昭和21年8月　：ビルマから復員。
昭和21年10月　：結婚。
昭和22年11月　：家の近くの山林を買う。
昭和23年2月　：馬落の杉山を買う（5万円）。
昭和30年5月　：屋根瓦を代える。
昭和32年　：杉山を買う。
昭和36年3月　：国民年金が始まる。
昭和36年　：大雪、麦不作。
昭和37年　：大雪、麦不作。
昭和37年　：ミシン（富士号、4万円）を買う。
昭和40年3月　：テレビ（5万2千円、白黒）を買う。
昭和47年5月　：農協有線放送開通。

手帳には、これ以外にも数多くの記事で埋められている。子供たちの出生と学校入学・卒業。「金の卵」として集団就職していった子供たち。そして転勤と転居を繰り返しながら、次第に伊良原と遠い地に離れていく子供たちの移動の有様。見知らぬ土地で出会い、婚約者を突然に連れてきて紹介したこと、都会での結婚式への参席と孫たちの誕生など、これらに関する記事すべての転載はここでは割愛せざるを得ない。それでも近所の家でテレビを見せてもらいながら、相撲中継やプロレス中継に釘付けであった子供たちのために、高価であったが、テレビを購入したことが記載されていることを紹介しても許していただけるだろう。1960年代の後半に書き換えた手帳であるので、紙質も決して上等ではないが、その紙面に記された記事の一つ一つが彼の人生を刻み込んだものである。

〈事例〉　伊良原尋常高等小学校を卒業したC男は、21歳から3年間にわたる平穏無事な会社員生活を経るが、召集令状を手にして、久留米連隊（輜重兵）に入隊してからの約8年間の軍隊生活だけは涙して語るほどである。久留米から門司港へ移動し、そこから輸送船に乗り、「南支」（中国南部）の広東に上陸した後、徒歩行軍でビルマのインパール作戦に参加。フーコン付近での戦闘の模様、シッタン河付近にて敗戦を知り、そのままビルマのトンウに設置された捕虜収容所に収監されたこと、ラングーンから輸送船で帰国したことなどは、鮮明に記憶している。

こうした戦争体験は、すべて戦後になってから、ある戦争記録制作プロダクションの手で、各自の記録書が作られて、その一つ一つが表座敷の額に納められている。額に納められている限り、C男の記録はそれで固定し、記憶の錯誤はなくなるとともに、ときおり彼はそれを読むことで人生を反芻する。たとえ作り上げられた戦争記録書が本当であろうとなかろうと、それに無関係に。

軍隊生活情報が彼の脳裏に刻み込まれたのは敗戦後であったので、彼自身によって選択された情報がインプットされており、その意味ではコントロールされたものである。名作「ビルマの竪琴」などで我々が知るインパール作戦の悲劇的結末は、彼の口から直接に聞くことはできない。食糧・弾薬の補給が絶え、戦友たちが飢餓状態の中で次々と無惨にも息を絶った事実を、目の前で見つづけた彼が、この記憶を失ったはずはない。想像するに、語るに語れない「心の澱」が口を開かせないのかもしれない。

次に、戦地から若者が復員してきた昭和20年代初期の、民主化運動に高揚した伊良原の熱気を感じることとしたい。

(6) 敗戦直後の農村文化啓蒙活動

『伊良原村史』によると、次のように昭和25年の敗戦の混乱の中で、伊良原でも各種の農村文化啓蒙活動が活発に展開されたとある（昭和27年、82―84頁）。当時、復員軍人を中心とした若者たちが日本各地の農漁村で活発に農村文化啓蒙運動を展開したが、その影響下にあった伊良原でも、いくつかの団体が、結成された。

①「理想郷建設同志会」（主催者：村田彦九郎）―― 敗戦後、伊良原村の民主的運動の先駆けをなし、昭和21年3月から半年間、に機関誌「希望」を通して、文化活動。

②「農村活動」（主催者：緒方義夫）―― 旧伊良原小学校（現農協購買部）にて毎週土曜日、豊前高校から講師を招聘して勉強会を開く。昭和21年から昭和22年6月まで活動は続き、農村の文化向上と民主化をめざした。会員20～30名。

③「修養会」（主催者：木村寿夫）―― 青年団活動や青年学級の先駆的活動。昭和23年10月に設立され、帆柱の青年約30名で組織された。昭和25年3月で活動は停止した。

〈事例〉　農村文化の向上を目的として、伊良原の若者およそ10名ほどが参加して、「七曜会」を結成した。最年長が松本伍郎さんであったので、彼が会長に選出された。白川盈先生や郵便局長などを顧問に据えて、敗戦後の混乱した社会の中で果敢に行政批判したりするなど、社会正義に燃え上がっていた。白川先生などに顧問をお願いしたのは、村の有力者たちから攻撃されることを避けたからである。会の発足は昭和23年から24年頃であったが、2～3年間続いたように記憶している。会の中心メンバーは、白川行夫さん・小野昭治さん・緒方寅夫さん・白川寅平さんたちであった。機関誌『明朗』は毎月発刊するように努めたが、なかなか原稿が思うように集まらず、苦労の連続であった。編集長・資金調達係は、白川行夫さん。ガリ版きりは、小野昭治さんと和田輝男さんであった。和田さんが農協に勤務していたので、次第に機関誌が農協の広報誌の性格も帯びていった。会費はあったように思うが、記憶していない。むしろ村の財産家や村会議員などから、一人当たり月2000円程度の寄付金を募り、それが主な活動の資金源であった。

④「七曜会」（会長：松本伍郎）―― 機関誌「明朗」の発刊を通して、民主化を志向。昭和25年5月、下伊良原に設立された。

復員してきた彼ら若者たちは、空襲で焦土と化した都会に出ていこうにもいけず、父親が生業としてきた農作業に従事することになった。それとても数年間の辛抱であった。

(7)「野焼き」（焼畑農耕）

今日、伊良原では犀川町農業協同組合などの指導をうけながら、多収量の早期良質米生産に主力が注がれている。祓川周辺には、昭和45年以後の稲作の生産調整にも拘わらず、たとえ年毎に水田の作付面積が減少していようとも、秋にはたわわな稲穂の実りを見ることが出来る。

〈事例〉　昔から伊良原の米は美味しくて評判が良かったのは、「伊良原の米は水で作り、豊津の米は湯で作る」といわれるように、水が良いからである。
昔から今までの米の品種は、次の通り。

①カメジ、	②コマ、
③ハダハチ	④新力
⑤アサヒ新力	⑥改良新力
⑦日本晴	⑧黄金晴
⑨ミネアサヒ	⑩ニホンホマレ
⑪ツクシ	⑫コシヒカリ

ところで伊良原には、水田農耕以前の焼畑耕作が行われていた。『犀川町誌』などでもそれに関連した記事を見ることはないので、伊良原の人々の記憶から急速に失われつつあるようだ。

伊良原では、かつて焼畑農耕を「キリハタ」とも「ノヤキ」とも呼んだ。「キリハタ」というのは、枝を払い、木を切るだけでなく、下草を刈り、伐採した枝や幹を再度細断しながら、焼畑耕地を斜面一面につくることに由来するに違いない。こうした手間のかかる作業が終わり、伐採した木が乾燥すると、次は火入れであるから、「ノヤキ」と呼ばれたに違いない。もっともその火入れの前に、延焼防止の幅一間ほどの「カイテ」（防火線）を焼畑の上と両側に作る必要がある。いよいよ火入れの儀式であるが、伊良原では早くから「唱え言」を忘れ去ったようで、その言葉を知っている人はいない。かって九州の椎葉村や米良村などの山の民は、コウザキやカクラなどの独自な「山の神」を祭祀していたが、ここ伊良原では、「一献」とか「二十日」といった言葉がわずかに残っているだけで、今やどのような儀礼であったか明白でない。ともかく「山の神」（女神）への敬虔な祈りが終わると、火入れである。

〈事例〉　夏、上用の内に山の伐採を始めるのが、習わしであった。8月20日に火を入れる。その後、8月27日から28日にかけて種を植える。この8月28日に「ソバ」の種を植えるのは、この日が「ソバの立つ日」（ソバの生まれた日）と言われているからである。
1年目は、ソバ。
2年目は、粟あるいは小豆、もしくはオカボ。
3年目は、里芋あるいはカライモ。
もう4年目からは雑草と木が茂るので、それでその焼畑はおしまい。
特別に「山の神」に対するお祭りはしないが、山主が酒を出し、振る舞うことになっている。
第二次大戦中まで焼畑農耕をしたが、イノシシが出没しはじめてからは、イノシシが食べてしまうので、やってももうからない、というので焼畑をやめてしまった。
伊良原全体では10町歩程度やっていたようだ。
自分は5畝程度していたが、3反で10俵ほどのソバが収穫できた。

火入れが終わり、その後、3年周期で作物の栽培順序が決まる。伊良原の焼畑の輪作体系例の一つとして、次の証言もある。

〈事例〉
1年目 —— ソバ
2年目 —— 里芋・小豆
3年目 —— オカボ（陸稲）・粟

今、焼畑農耕が水稲耕作以前の古い農耕技術であるかどうかは不問に付しておきたいが、焼畑農耕の技術やこれを取り巻く習俗や慣行、農耕儀礼などの解明はもはやほとんど不可能な状態にある。

〈事例〉　伊良原では、杉30年、檜40年と言って、その成長した樹木を伐採して売ったりしていた。その切ったあとを「ノヤキ」にして利用した。「ノサク」とも言うが、その焼畑を活用するところから、この名が付いたに違いない。

自分の記憶では、

1年目は、ソバ。

2年目は、里芋あるいはオカボ（モチゴメ、「ハタケイネ」と呼んだ）。

3年目は、小豆。

を蒔いて育てたようである。この「ハタケイネ」の特徴は、インディカ米に似た粒の細長いモチゴメであったことを覚えている。もはや伊良原には、この「ハタケイネ」はどこにも見あたらないようだ。

火入れをすまして、種を植える2日から3日前に、枝などを畑の真ん中にかきおとす「カイテ」を作っておく。地主さんは御神酒を撒いた後、最初に火を付ける役となる。まずてっぺんから始めて、次に両側に火を付けないと、必ず山火事を起こすもとである。

伊良原の山林地主として有名なのは、小笠原さんと蔵内さん（田川市の炭坑成金として有名であった）であった。およそ10町歩ほどの地主であったらしい。

昭和50年頃まで続いていたようだが、あるいはその時期は間違っているかもしれない。イノシシが出没して、収穫が思うように上がらないので、やめてしまったし、また町の森林組合の指導もあった。森林組合によると、焼畑を続けると、地力が低下するという。

さて、火入れをしても、それで種を蒔くのではなく、もう一度焼け残った大きな木などを集めて火を付けなくてはならない。2度目の火入れを「ヨセヤキ」と言った。

「所の人が持っていた」焼畑での収穫は、ハタケイネで1反歩1俵の割で取れたし、またソバであれば、1反歩6斗ぐらいの割で取れた。

というのもこれら焼畑農耕そのものを知っている人がごく少数になったからである。

そのごく少数の若者たちが組織したのが、青年団であった。

(8) 青年団活動

第二次世界大戦以前には、若い独身男女の集まりは、

①若者組 —— 伊良原尋常小学校を出た独身者

②青年団 —— 15歳～25歳までの独身男女

③処女会 —— 独身女性

の三つがあった。

昭和21年頃、復員してきた若者を中心として、伊良原に青年団が再結成された。この組織は男性のみで、女性だけの集まりは今まで通り「処女会」と呼ばれた。平田製材所の空き職人小屋に若い男女が集まったりした。

後に、伊良原青年団の中からは、福岡県青年団長も輩出した。

〈事例〉　敗戦後の昭和21年ごろ、伊良原の青年男子の約20～30人が集まって、青年団を組織した。町からの補助金とか、他の青年団との交渉ごとなどがなかったので、特別に団長などは決めなかった。リーダーは、斉藤正次さん・白川寅平さん・緒方義夫さんらであった。助言者として、白川寅平さんの長兄（九州帝国大学中退の知識人）とか緒方静馬さんなどがいた。この助言者に対しては、弁論大会の審査委員とか、弁論大会のテーマに迷ったときの相談役になってもらった。会費もなかったので、団員名簿を作る必要がなかった。実際団員の正確な数は誰にもわからなかった。

青年団の主な活動は、①村芝居を興行すること、②登山活動（英彦山）、③盆踊りの主催、④高木神社の奉納相撲（草相撲）への参加、⑤上伊良原の弘法相撲に出場すること、⑥弁論大会を主催することなど、であった。

〈事例〉　最初の弁論大会は、昭和21年の8月に開催された。夏の暑い頃に、当時だからクーラーもエアコンもない上伊良原の集会所でおこなった。聴衆は、およそ30名ほどであった。農村社会運動や文化啓蒙運動の息吹の中で、この弁論大会を開いた。弁士は、3名であったと記憶している。斉藤正次さんは「これからの農業」、緒方義夫さんは「憲法の平和主義について」の題で話したが、白川寅平さんが何を話したか忘れてしまった。1等は、斉藤正次さんであったが、だからといって一等賞品があるわけではなかった。とにかく民主主義の世の中になったことを、誰もが喜んだ内容であった。

〈事例〉　敗戦直後の混乱した日本では誰しも文化に飢餓状態にあったので、伊良原でもいくつかの地区別に、演芸活動を行うことになった。青年団活動の一環として、村芝居を行うことになった。残念なことに芝居の題目は忘れてしまったが、歌舞伎の「お軽と寛平」であったかもしれない。

当日の舞踊は、「野崎参り」であった。女役は伊良原の「処女会」に依頼して、共演者を募った。斉藤正次さんと白川寅平さんとで、当時豊津の光留にあった地方劇団に行き、劇団員からストーリーを口伝えで聞いて、覚えた。カツラとか刀などの小道具、舞台衣装に至るまで借り出して、始めた。台本は準備しなかった。練習場は、伊良原公民館であった。主演は斉藤正次さん、共演者には加藤信子さんや野村綾子さん。舞台は伊良原小学校の講堂であった。沢山の人が見に来てくれたことは忘れない。「もう、むやみに戦争で死ぬことはない」と言う実感がして、幸せであった。

今、伊良原に住む人々は、この敗戦直後の精神的高揚を胸に秘めて、誰に語ることもない。言い過ぎの誹りを受けるかもしれないが、昭和20年代初期の伊良原に集まった若者たちは、「リンゴの

歌」（サトウハチロー作詞）を唱いながら、明日の日本の復興を信じ、未来に続く伊良原の繁栄を求めて、活発な行動していたと考えて良いだろう。

そして復員をしてきた若者たちは、戦時中に失った青春を取り戻そうとして、次々と結婚していった。

(9) 婿マギラカシ

伊良原地域の婚姻習俗は『犀川町誌』（1083－1084頁）に略述してあり、それで十分であろう。

ここでは、まず伊良原地域の通婚圏に関する人々の言い伝えに耳を傾けることとしよう。

〈事例〉　伊良原でも、上と下とでは大きく違う。「引き継ぎ、引っ張る」（地域内婚姻）が上伊良原の特徴であるとすれば、下伊良原の特徴は「山越しとの縁談」である。

伊良原地域の場合、上伊良原が同一地区内で婚姻相手を求める傾向があるのに対して、下伊良原は伊良原地域のみならず、谷を隔てた築城町とか寒田村、赤村などとも縁組みを結んできたという。

この言い伝えを裏付けるものとして、明治3年のデータを紹介しておこう。川本英紀氏作成の「明治三年仲津郡節丸手永下伊良原村人別男女御改帳」（豊津町歴史民俗資料館所蔵）整理データによると、下伊良原地域では、明治3年の段階でも、地域内で71件、地域外で92件というように、その通婚圏は地域外が優勢であった。「築上郡上本庄村」「仲津郡内垣村」「築上郡寒田村」「田川郡下津野村」などを例に挙げるだけで、容易に判明しよう。このデータの分析は今後に残された問題であるが、一見していえることは、江戸時代からつい最近に至るまで、旧藩境とか谷などの社会的・自然的境界線を超越した通婚圏が存在していたことである。帆柱村の通婚圏を調査した川本英紀氏も、下伊良原と同様な結果を導いている（『郷土誌さいがわ』第14号、平成8年、93－99頁）。

さて、「すみ酒→結納→婚礼」と進む婚姻儀礼も、ここ伊良原には「婿マギラカシ」という習俗があった。

昭和12年に結婚したD男とE女の場合を紹介しよう。

〈事例〉　昭和12年5月27日の海軍記念日に結婚した。本来1ヶ月前にすることになっていたが、あいにくと弟が肺炎になり、1ヶ月延期して挙式を挙げた。二人の結婚は親同士が決めた。結婚式当日、婿側から花嫁の家に、仲人夫婦（母方の兄）、婿、荷役（実弟）と婿マギラカシの五人がでかけた。相手の家に到着すると、まず仲人が挨拶した後、親子杯が交わされ、そして酒宴と移った。婿が先に帰宅した後、仲人夫婦と婿マギラカシ、荷役が花嫁を連れて「嫁入り」をした。夜12時を越えてはならないというので、その時刻を守った。花嫁は当時珍しいトラックに乗って嫁入りした。嫁提灯をつけて、夜道を歩いてくるのが、普通であった。婿側は、花嫁到着時刻に合わせて、4～5名で迎え提灯をして出迎えた。仲人の奥さんは「ツレガカサマ」と呼ばれ、花嫁の手を引きながら嫁ぎ先までの案内係りを務めた。

E女はD男家の入り口から入るとき、「テヒキババ」（手引き婆）に付き添われた。そのとき、花嫁は上がり口で1升桝に手を掛けて、床に手をつかないようにして上がるように指示された。

本客が始まった頃を見計らって、近所の老若男女が、花嫁見たさに競って障子を破って客間

をのぞき込む「障子破り」をした。

この「障子破り」は、人気があってこそされるものだから、と推奨された。

当日は明け方まで酒宴をし、お開きの時には「わらじをはかせる」といって、さらにお酒を勧め、それをお客が飲み干すと、「片手では悪い」といって、もう一杯勧めるので、客人は尽きることなく飲み続けた。

結婚式の2日目は、昼に「お茶のみ」と呼ぶ女性客、夜に「たる」と呼ぶ男性客を招待し、近所の人々への披露宴を開いた。

3日目には、「ミツメ」と言い新婚夫婦の嫁方への初入りが行われた。

この事例からほぼ10年経過し、第二次世界大戦を挟んだ次の例を紹介しよう。

〈事例〉　F男は、昭和21年に結婚した。花嫁G女はF男の家のすぐ近所に住んでいた。二人は年の差もあったので、ほとんど顔を合わせることもなかったが、近くに住む世話人の紹介で結婚することとなった。結婚式の当日、仲人夫婦と婿、婿マギラカシ（婿の次兄）の四人が花嫁方を訪れた。

花嫁の家で酒宴をした後、花婿が先に帰った。そして夜中に、仲人の奥さんである「ツレガカサマ」と共に、嫁入りした。玄関では、「テヒキババ」であるF男の姉が待ち受けていて、米を入れた一升桝を渡し、「お米を量って、所帯を任せるよ」と言った。土間でその一升枡を渡されて、花嫁は座敷に上がり、仏壇で手を合わせた後、二人を取り囲んで酒宴が始まった。

初夜は、花嫁と一緒に「ツレガカサマ」も宿泊した。

翌日の行事は、「お茶のみ」と「たる」であった。この日にも「ツレガカサマ」が宿泊したので、新婚夫婦は水入らずになることはなかった。

3日目には、「初入れ」をした。自分たちの頃には、「ミツメアルキ」とも呼んでいた。この「初入れ」には、新婚夫婦のほかに両親とテヒキババも同行した。お昼時であったので、身内だけで食事をとった。その後、全員で家に帰ってきて、本格的な新婚生活が始まった。

〈事例〉　G女の家では、結婚式当日、「デタテのお客」と「オムカエのお客」の二つの酒宴を開いた。「デタテのお客」とは、仲人夫婦にG女の親戚が集ったものであった。そのとき、「三三九度」を交わし、親戚のものがめでたいものであると言って謡曲「高砂」を唱ってくれた。

その後、夜明かしで酒宴が続いた。花嫁は「祝言提灯」をかざして嫁入りした。

推測するに、上の二つの「婿マギラカシ」の習俗は原態を変形させたものではあるまいか。婿と婿マギラカシ（婿とほぼ同年輩の若者）が連れ立って嫁方を訪問するのは奇妙である。わざわざ婿マギラカシを同行して、婿が嫁方に出向く意味が不明となるからである。むしろその名称から判断して、「マギラカス」わけであるから、婿ではない若者があたかも婿であるかのように装うことが大切だっっただろうか。そうであれば、かっては仲人夫婦と嫁方を訪れるのは、婿マギラカシ単独であったと考えたい。

仮に我々の推測に無理がなければ、伊良原の地に、昔、婿入り婚が存在していたが、近世以降に日本全国に武士階層から嫁入り婚が普及すると共に、ここでも次第に嫁入り婚が優勢になっていった。婿入り婚が姿を消していったものの、その化石的形態として「婿マギラカシ」が残ったと想定できないであろうか。つまり伊良原で嫁入り婚が支配的になるにつれて、かって行われていた婿入り婚の重要な要素である「嫁方での婚舎」儀礼を、本来の「婿」が担当するのではなく、「婿マギラカシ」がその主役を代理したと推測することである。これ以上の推論は厳に慎まなくてはならないが、一つの仮説として提出しておきたい。

この「婿マギラカシ」の習俗は、昭和37年にも存在したというが、結婚式そのものをホテルや結婚式場で行い、しかも伊良原外の男女が多く婚姻相手となった現在では、ほとんど行われなくなったようである。この特異な習俗の最盛期は昭和20年代初めの結婚ブームであったという。

しかしながら現実には、昭和25年の朝鮮戦争特需を契機にして復興していった日本経済の成長の波に呑まれかのごとく、人々は伊良原を離れ、北九州へ、関西へ、東京へと向かっていった。昔と変わらない景観を残し得ても、伊良原に暮らしたいと願う人々の大半が都市へと流出していった。

そうした伊良原から外部へとつながる通路に、国道496号がある。

(10) 伊良原の交通網

国道496号線は、伊良原の生命線である。国道496号は平成5年に旧・県道行橋・山国線が昇格したものであるが、この道路は明治42年に計画立案され、紆余曲折の後、大正2年に着手されたものである。完工は、大正14年。

〈事例〉

乗合自動車

私は、大正十二年、十七歳の時に、福岡市東中洲にあった東京自動車学校福岡分校で運転を学んだあと、兄の藤河勇（明治二十八年生まれ）と二人で、帆柱を本拠にして木炭や材木を運ぶ運送屋を営んだ。その後昭和二年に、帆柱 — 行橋間の乗合自動車（藤河バスと呼んだ）もはじめた。写真に写っている五台のバス（引用者注 — 省略）のうち三台目はビックだが、他の四台はフォード。バスといっても、現在のワゴン車程度の大きさで、運転席を含めて八人乗り。当時、米一俵（60㌔）10円60銭の時代に、新車のバスは一台千二〇〇円だった。時速は30～40㌔で、行橋 — 伊良原間を約一時間、行橋 — 帆柱間を約一時間半で結び、料金は行橋 — 帆柱間で二円五〇銭。停留所は決まっておらず、乗りたい人は家の前に旗を立てていた。今でいうフリーパスだった。昭和のはじめ、京都郡の中心地だった行橋町では、小倉、中津、久保新町、白川、椿市、蓑島、今井などに行くバスが次々に運行をはじめた。（藤川則松氏談『犀川町誌』511頁）

伊良原地区の交通インフラ整備の歩みは、次の通りである。

①大正12年：加藤大吉氏が創業した定期乗合自動車開通（下伊良原・犀川間）

②大正14年：県道行橋・山国線の道路改修完成

③大正15年：藤河勇氏が創業した定期乗合バス運行（帆柱・行橋間）

④昭和18年：行橋・伊良原間の乗合バスが西鉄バスに移管されたが、昭和19年に道路整備不良

とガソリン不足で定期運行が中止された。昭和22年に再開。行橋～上伊良原間の運行は、一日4往復。
⑤昭和26年：県道野峠工事着工
⑥昭和33年：西鉄バス運行開始（犀川～木井馬場、上伊良原～帆柱）
⑦昭和43年：県道行橋～山国線の野峠開通
⑧平成5年：県道行橋・山国線が国道に昇格

ところが昭和10年代には、多くの人々が徒歩で犀川や小倉までも出かけ、時には大八車を引きながら、往来したという。

〈事例〉　軍隊の行軍は、1時間で1里であった。この調子で歩くので、伊良原から犀川駅までの3里は3時間程度で到着できた。時には、門司の恒見までおよそ7時間で歩いたこともある。

〈事例〉　戦前、小倉市内の学校に通っていたので、たまの日曜日に伊良原に帰るのは、難儀をした。バスに乗ろうにも、本数が少ないのと、行橋から帆柱間を往復していたので、皆は犀川から伊良原へ行くのにどうしても歩かざるを得なかった。犀川から伊良原までの3里の道のりは、片道約3時間かかったので、一日の休みでは足らなかったので、帰るに帰れなかった。

この伊良原を縦断する道を往来したのは、行商人、富山の薬売りであったし、英彦山の山伏や行者（「お札売り」）、サンカと呼ばれる人々であった。

しかしこの通路を最も利用したのは、両親を残して、都市に働きに出かけた伊良原出身の若者たちであった。

（11）伊良原の景観

「息子や娘たちの帰郷を待つ」
「都市に住む孫からの電話を待つ」

伊良原地域でよく聞く言葉は、「待つ」。「古巣に帰る」という言葉もあると聞くが、このふるさと伊良原は、誰もが帰郷する前に、高木神社も農協も小学校も、みな湖底に沈んでしまうだろう。計画が発表されてから、およそ30年経過した。「だれのために」。伊良原ダム建設が多目的と言われても、伊良原の人々は自問自答してきた。たとえ伊良原を南北に結ぶ国道496号（旧県道行橋・山国線）がきれいに舗装され、便利な交通インフラが実現されても、生まれ育った古里の景観が水中に没してしまうことに、人々の心の寂しさはぬぐえないだろう。

大正年間の伊良原の景勝を唱った「道中記」で、伊良原の村の中を巡遊しよう。

〈事例〉　長沼庄市「伊良原道中記」（大正14年道路改修記念）

「此処は床しき伊良原の、村の甫めは高座なる、広瀬の前に流れ出る、釜の河内の石清水、荒戸の橋を打ち渡り、西に聳ゆる丸岳は、伊良原富士と唱わるる、茂る麓の森の中、高木神社は千年経る、光仁四年の秋の頃、彦山第四世座主院の、村の鎮守と祀られし、最も緑麗なお宮なり、東に響く鐘の音は、善男善女偶宮の、菩提の道に明秀寺、道を過ぐれば新道の、西に架けたる新橋は、岩谷河内の邑を過ぎ、琴弾瀧に至るとや、登る間も無く伊良原校、学びの庭に遊ぶ子の、

末の末迄想いつつ、村の中とや中村に、珠音高き村役場」(『伊良原村史』昭和27年、2頁)」

〈事例〉　昔と今を比べても、伊良原はほとんど変化していない。変わったのは、荒戸橋の位置と農協付近である。

昔の荒戸橋は、いまより10～15メートル下流に掛けられていた木橋であった。それが老朽化し、危険になったので、昭和6年にコンクリート橋に掛け替えられた。

農協付近にしても、昭和7年に伊良原小学校が現在地に移転するまで、昔はそこにあった。横に農協の購買部があったし、駐在所もあった。

(12) 伊良原にあった懐かしき店舗

1999年現在、伊良原水没予定地域で人々が買い物できる店舗は、松本店（タバコ屋）と犀川農協購買部の二カ所である。マイカー時代の今、犀川や豊津の各種専門店舗、そして行橋・北九州市の大型スーパーマーケット・百貨店への往来も以前と比べてはるかに容易になっており、生鮮食品や家電製品、家具などの大型商品、高級品、冠婚葬祭のお返し品などは、伊良原以外の地で購入せざるを得ない。

皮肉なことに過疎化が進み、しかも老齢化が進んだ伊良原では、日々の生活物資でさえ購入が難しくなっている。購買者の激減に伴う売り上げ低下、新製品の買い換え行動や購買意欲の衰えによる商品の回転率の悪化などを主な理由として、次々と閉店していったからである。もっとも深刻なのは、家計を握る女性の高齢化が彼女らの行動範囲を狭くしたからでもある。80歳近くのある老婆の日常行動圏を紹介するだけでも、このことがよく判明するだろう。肉体的な衰えから自転車に乗れず、むろん自動車免許を持たない彼女の日常行動圏は当然に限定される。農作業やふるさと会館に出かける場合を除けば、彼女が集落から200メートル圏外に出かけることはほとんどない。

老夫婦の一週間の献立が如実に物語るように、生魚や賞味期限が短い生鮮食品が食卓に並ぶことはまれである。年齢からして高蛋白・高脂肪、暴飲・暴食などは許されるはずもなく、食が細くなる一方で、加えて冷凍食品の味を習慣化していないのであれば、冷蔵庫の中にたっぷりと食料品が納められていないのは当然である。

集落から集落へとまたがって、しかも消費行動範囲が狭くなるばかりの伊良原にあって、購買意欲の高い買い手を期待できない以上、自然と店舗が閉店に追い込まれていくのは時代の流れであろう。「店を畳む」時期が伊良原に到来したのは、多数の若者が戦地に出征し、生活物資が窮乏していった第二次世界大戦中と、すべての若者が流出していった高度経済成長期の、二つをピークとした。

さて、懐かしきお店を訪ねて、伊良原を歩き回ることとしよう。

〈事例〉　荒戸橋から上にのぼると、最初に目に入ったのは、「緒方店」(昭和2～3年頃から戦時中まで）であった。緒方さんは耶馬渓出身と伝えられていて、駄菓子・小間物などを販売していた。この家の緒方タツオさんや緒方トヨコさんの名前が思い出される。次は肉屋の「横田店」(昭和10年頃まで）である。今の森さんの書庫付近にあったという。高木神社の橋のたもとには、屋号「橋本」の豆腐屋「緒方店」があった。昭和14～15年頃まで、お婆さん（緒方ひぶみ）が一人で作っていた。祭礼が近づくと、村々から人々が大豆を持ち込み、緒方さんに豆腐を作ってほしいとお願いしたので、緒方さんは一度期の大量注文に徹夜して作っていた。

今の「松本店」（タバコ屋）には、昔、産業組合の店があった。緒方さんから長野さん、そして白川さんへと担当者が変わりながら、産業組合のお店は今の農協購買部へと移り変わった。

野村の漢方医があったことも、忘れられない。この家の元の主人は、旧藩士族の野村條七さんであった。母は中津藩の御典医豊後町田中熊蔵さんの女であった。明治時代の初め、野村槌太郎さんが医師であった。

少し前まで伊良原には旅館が2軒あった。岩屋旅館と、それに隣接した朝日旅館である。この朝日旅館は旅籠であり、富山の薬売りさんたちが定宿としていた。

戦後、床屋さんといえば、石川さんであるが、その前には毎日木井馬場から自転車で通ってきていた菊池さんもいた。10年から20年間、菊池床屋さんに頭を刈ってもらっていた。

この石川床屋の横に、石川自転車屋があった。

不動さんの登り口に、進さんのお嫁さんが経営する進店があった。ご主人は学校の先生であったらしい。ごく短い間で、すぐその店を畳んでしまわれた。この店では、メンコなどのおもちゃや駄菓子などを売っていたようだ。

（13）助産婦

〈事例〉　今でこそ出産は病院でするが、昔は各自の家でしていたので、伊良原にも助産婦さんがいた。昭和の初めには、郵便局の真裏に住んでおられた角タツオさんのおばあちゃんが助産婦の代わりをしていた。

その後、築上郡の片山の医院で看護婦の仕事に就いた後、助産婦の免許を取って伊良原に戻ってきた神崎ツルヨさんが、下伊良原の子供たちの多くを取り上げた。

この神崎助産婦は下伊良原の多くの家庭と密接な関係にあった。出産儀礼の一つである「15夜」には、伊良原のどの家からも神崎さんを招待し、祝いをしたという。

では伊良原の家々を結びつけているのは、何であろうか。

（14）コウウチ（講内）

伊良原のお年寄りの中には、現在の「常会」を「講内」とも呼ぶ。「常会」の前身は「隣組」であるが、その「隣組」の前身が「講内」である。

「講内」とは、江戸時代の五人組や十人組等の制度を継承した組織である。伊良原では浄土真宗が盛んであったので、その報恩講が主体となって、社会的講を作り出して相互扶助の役割を果たす「講内」が出来上がったと推定して良いだろう。字名の「東講」や屋号「御座」などが現存するのは、この推論を裏付けるはずである。

国民総動員体制の末端組織である「隣組」は、伊良原でも昭和10年頃に「交隣相助、共同防衛」を目的として、およそ10戸内外で編成された。第二次世界大戦中には、物資の配給や国民貯蓄などの基本単位として機能したという。昭和22年にポツダム政令の公布によって「隣組」が廃止されたために、それまでの「隣組常会」の中から「隣組」を削除して、「常会」と改称されたのであった。「隣組」と同様に、政府－福岡県－犀川町－伊良原地区－常会という縦の上意下達機構は今も生き

ている。「常会」そのものは本質的に「隣組」と大きく異なる組織ではないが、現在の主要な役割は、税金・公共料金等の徴収業務の代行と、役場からの各種の伝達事項・通知などである。時には「常会」が町長選挙・村会議員・区長選挙の選挙母体ともなる。選挙事務所に詰める運動員や宣伝カーで出かける候補を送り出す「見送りさん」役なども、この「常会」で選ぶのが一般的である。毎月24日に開催。

〈事例〉　現在（1998年）、伊良原地区の中でも広瀬と東講・高座などでは「常会」を開いていない。その理由は、農協などの自動振り込みが普及したことと、老人だけの家では、たとえお茶菓子だけの振る舞いと言っても、その準備が面倒になったからである。またダム建設の動きも微妙に影響を与えたらしい。

昔、「常会」は「講内」とも呼んでいたが、それ以外にも「お座敷」とも言っていた。「お座敷」と呼んだ理由は明確ではないが、毎月24日の夜、各家持ち周りで、簡単な料理と酒一升が振る舞われていたからではないか。その夜、当番の家は饅頭、昆布・牛蒡（ゴンボ）・高野豆腐の「組み付け」と混ぜご飯の準備をして、各家々に持ち帰らせたという。子供たちは、中でも饅頭を心待ちにして親の帰りを待ちわびていた。

なぜ毎月24日に「常会」が開催されるのかわからないが、翌日の25日が何かの支払日であったかもしれない。

〈事例〉　戦前の講内は、1ヶ月1回の顔見せ、団欒の場であった。総代に対する謝礼は、「シブ」と呼んだ。1年間の給料に該当するが、総代は夏に麦1升、冬に玄米1升を受け取った。講内は正月に「オハチブチ」（お初扶持）を準備して、村内の学校の先生・医者・獣医・僧侶・神官などに持参した。

(15) 終わりに

本稿で、筆者が用意した解読装置は民俗学で用いられている理論や方法である。これらの装置を利用して試みようとしたものは、伊良原の過去の歴史や文化をまるごと記述したり、復元することではない。それが誰にも不可能なことは自明の理だからである。むしろ人々の言い伝えの中から、その核となる心を探り当てて、かって人々の「生きる証」となっていたものが何であったか、を解明することであった。

いつ終わるともしれない伊良原民俗調査の泥沼の中で、気づいたことは、日本列島改造論からバブル経済をへて、日本全国の景観が一変し、日本的共同体を支えていた精神的支柱へのおそれを失った日本人が多い中でも、この地では、高木神社の神幸祭を精神的支柱として生活しているという事実である。「カミ・地霊」への畏怖と言い換えても良いであろうが、外部世界では常識的な「心の荒廃」とか「人間疎外」、とにかくカネさえあればいいと言ったニヒリズム、刹那主義的欲望心などがその姿を潜め、かっての「誇り高い文化」を保っていることである。

少しでもよりよい暮らしを求めて生きるのは当然としても、あらゆる問題は経済成長で解決するという幻想が崩れ、しかも急成長を支えた終身雇用・年功序列・退職金制度・老齢年金制度などが

危機的状況下にある今、われわれは伊良原の人々の暮らしと言い伝えの中から、何を学べばよいのであろうか。戦後日本では、人々は働き方を知ったけれども、生き方を考えることはなかった。経済成長を追求し続けたけれども、経済以外の目標を設定することを忘れていたのではないだろうか。

ここ伊良原を初めて訪れたひとであれば、「どこか懐かしい風景と人々の穏やかな暮らし」といった初印象を述べるであろうが、ケースバイ・ケースの人間関係を、人間と自然の関係を、人間とカミとの関係を、人々が賢明な知恵を出し合って、必死に生きていることに気づくであろう。

その意味では、伊良原ダムの完成の日に、伊良原の民俗は彼らの子孫に永久に保存されるに違いない。

第2節　「昔話」

調査を開始した当初、伊良原の地で「神話・伝説・昔話」の採集は困難をきわめた。語り手が見あたらないのである。「歌をわすれたカナリア」という言葉があるが、村人は「語り」を忘れてしまったのではないかと勘違えしたほどであった。あるいは「かくれんぼ」をしているのではないかとさえ思った。それゆえに私の調査方法に問題があるかと考えたが、次第にそうでもないことに気づきはじめたのは、調査開始後、かなり経過してからであった。

これまでに採集されていた昔話を二つ紹介しておこう。

(1) 仏岩

仏岩は釜の河内と岩屋河内との中間に位置し、洞窟の中にお堂が再建され、観音様が安置されている。

〈事例〉　昔、わらび取りに来た村人が、ある日、この仏像は金でできているものと信じこみ、そーっと我が家に持ち帰ることにし、途中までくると（現在あるメクラ田）、急に目がみえなくなり、動けなくなったという。

また、それからというものは不幸がたび重なり暗い日々を過ごしていたが、ある日、占い者にその事を話すと「仏像をお粗末になっているので、元あった所にお返しすれば必ず元の生活にかえる」というありがたいお言葉を聞き、早速その足で元の場所にお返ししたところが、次第に目も開き、元のような幸福な日々が蘇ったという。

その後、仏岩にその観音像を安置し、村人達の魂のよりどころとなり、参拝者が後をたたないと云う。（神崎昭吾「仏岩」『郷土誌さいがわ』93－94頁）

(2) 河童の話

〈事例〉　「かわんとん」（河童）は淵に住みつくという。山下行希さん（大工さん）の家の前の火の口井堰にいると言われている。

この河童のいたずらで、20～30年前に北九州の人が音無し淵で死んだそうである。

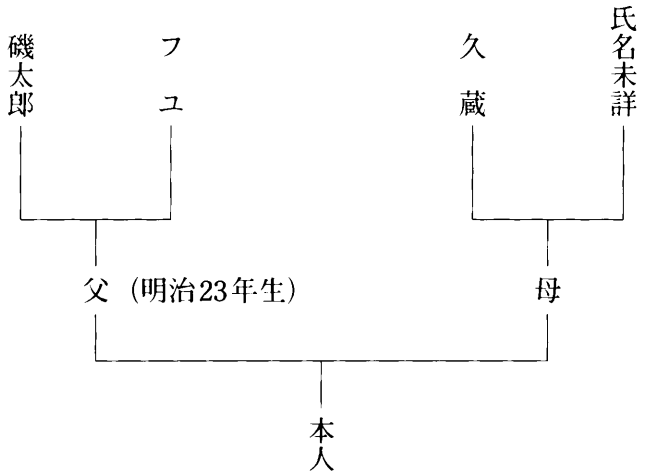
伊良原郵便局の前の淵は「オヨン淵」と呼ばれている。この深い淵に河童が住んでいるそうである。

田中製材所に槇を取りに来た人が心臓麻痺で死んだ。「河童がその人を好きになった」からだそうだ。

昔話の伝来経路

ある話者は伊良原一の昔話の管理者である。彼が保有する昔話はおよそ20近くであるが、80歳を過ぎた今、首尾一貫して語り得るのはそのうちの数話に過ぎない。彼の記憶力が低下したと言うよりも、むしろ語る必要がなくなって久しくなったために忘却していったという。「団塊の世代」に属する子供達を持つ彼の人生の軌跡を見ると、子供達が幼少時、現金収入を得るために町外の工場に働きに出かけ、子供達に接する時間が少なかったのである。「囲炉裏端」が存在しない伊良原では、家族に昔話を語る場所はコタツにあたりながらであるが、その時間がなかった。寸暇を惜しんで、子供達に語ろうにも、その時には子供達の耳にラジオがあり、目にテレビがあった。アミューズメントと刺激・興奮度において圧倒的にまさるテレビの情報量に、昔話は敗北せざるを得ない。したがって小倉・博多に在住する子供に問い合わせても、彼らはテレビの中で「日本昔ばなし」で見た昔話を知っていても、伊良原が語り伝えてきたそれを知らないと言う。

さて、この話者の場合、母方が昔話伝来ルートであった。明治20年代初めに出生した母と、その祖母が語り手である。祖母の誕生年は江戸時代末期・明治初めに遡るはずである。「ババサン」と呼んだこの祖母が、そして母が昔話を好んで語ったという。



その彼が語り伝える話は、「百合若大臣」「別府の太郎・次郎の話」「狐を助けた話」「狐にだまされた話」「親棄て山」と「桃太郎」である。もっともこれらのすべてを完形昔話として伝承しているわけでなく、もはや調査者の問いに答える程度の断片的なものにすぎない。完全な内容を語り得るのは、次に紹介する「桃太郎」のみである。

注目すべきは、冒頭句と結句である。昔話の冒頭句として、母親や祖母などから聞いたのは、「昔々あったげな」であり、結句は「米のダンゴ」であったという。「ムギのダンゴ」ではなく、「蕎麦のダンゴ」でもない理由は、見当が付かないようである。

〈事例〉

昔々あったげな。

川に桃が流れてきて、

「じいちゃんに、くわりょか、こぽりんしょ」

「ばあちゃんに、くわりょか、こぽりんこ」

といったという。正月の食い物はこれで大丈夫と考えて、二人は桃を家に持ち帰った。

包丁で切ると、不思議なことに桃の中から男の子が出てきた。おじいさんとおばあさんは神様からの授けものと信じて、桃太郎と名付けた。

桃太郎は日々優しい子に育っていった。

ところが桃太郎はよその子と遊び方が違っていた。

ある日、桃太郎は「下の島へ鬼退治に行きます」といって、おじいさんとおばあさんに別れを告げた。

「本当は永くお世話しなくてはなりませんが、どうか私が帰ってくるまで、元気でいて下さい」

桃太郎が「永のいとま」を述べて、歩きだしたら、「わんわん」と犬が鳴いて、腰に付けたダンゴをほしがった。

「向こうの島に鬼がいるので、鬼退治に行くところです」と桃太郎が言うので、犬は「それではお供をしましょう」として、付いていった。

しばらくすると、山を飛んで回るキジにあった。「貴方はどこにお越しになりますか」と尋ねられたので、桃太郎は「向こうの島に鬼がいるので、鬼退治に行くところです」と答えた。「空を飛んで連絡する鳥が必要でしょう」と言って、キジは桃太郎たちに同行して鬼退治に出かけた。

またしばらくすると、猿がキジの腰に付けたダンゴを見つけて、

「お腰に付けたダンゴを下さいな」

と言って、ダンゴをほしがった。

桃太郎は犬とキジと猿の助けを得て、百合若大臣が退治した鬼の残党を退治した。

「米のダンゴ」(「お終い」の意味)

聞き手が標準語で語りかけているので、つい語り手も標準語で武装して昔話「桃太郎」を語ってくれているが、この話は、完全な「桃太郎」ではないだろう。少なくとも「百合若大臣」などとの混同が見られるし、またストーリーに省略と飛躍が少なくない。

とはいうものの、「じいちゃんに、くわりょか、こぽりんしょ」とか「ばあちゃんに、くわりょか、こぽりんこ」などの擬態語を効果的に利用した話しぶりには、まったく作為は感じられず、本来の話はこのように語り伝えられたものであっただろうと推測されたほどである。残念なのは、これ以外の話しのストーリーを完全に再現できないことである。ひたすら「米のダンゴ」で終った昔話の結句部分に強い関心が向けられるばかりであった。

なお、この語り手は、これら以外にも伝承する昔話を保有しているが、下記に列挙するように伊良原小学校時代に先生から聞いたものばかりであるという。本稿では割愛するが、「ジャックと豆の木」はほぼ翻訳体の内容を語り伝えている。

昔　話　名	読んだり聞いたりした所
かちかち山	伊良原小学校
花咲爺	伊良原小学校
舌切雀	伊良原小学校
サルカニ合戦	伊良原小学校
文福茶釜	伊良原小学校
ジャックと豆の木	伊良原小学校
こぶとり爺	伊良原小学校
鶴の恩返し	ある新興宗教の雑誌記事

(2) 伝説

伊良原には、宇都宮氏の流れを強く意識した伝承が多く伝えられている。自らの存立基盤や権威の由来としても有効であると考えられているようで、史実かどうかとは無関係に宇都宮氏を取り巻く伝承に満ちている。こうした歴史意識の強い伝承を、あえて「昔話」と区別して、「伝説」と呼んでよいだろう。

次は、その内の一つである。

〈事例〉　西の塚の由来記

犀川町大字下伊良原字西之塚の中央に城山有り其の山頂に大蔵日向守の墓有り「昭和30年緒方寅夫之建」元自然石が一墓あった。

古老の話に依れば天正十七年宇都宮最後の戦に方々有った各所の城が次々に落ち落武者が現代西之塚の城山に集まった中に武勇の誉高き大蔵日向守と云う人が居た。戦いが静まりし夕方敵情視察の為椿の本の辺まで降り敵情視察中敵の流れ矢に当たり戦死を遂げられた。

当時敗戦の事とて遺体をその場に埋め置きしが日向守の墓の前を通る人けが又は馬上の人は落馬等たたり激しき為後に人が住む様に成ってから城山の山頂に上げ塚せしのと云ふ事で有る。是れより西之塚と云ふ。

又城山の隣りに小字寺之谷と云う所が有る。此処に戦死者の菩提を弔う為に瑞音寺と云う寺が有った「禅宗」が明治十年に取潰しにあい本尊釈迦如来の仏像は現在明秀寺に合祀して有る。

(緒方寅夫「西之塚の由来記」『郷土誌さいがわ』創刊号、昭和五十六年、13頁)

第3節　「諺」

①天候に関するもの

日々の農作業や山仕事のバロメーターとして、伊良原の人々はまず天候（自然秩序）に最大の注意を向けたようである。風・雨・雷などの大気現象をコントロールできないだけに、「昔の人はよく見ていた」と語るように、自然界の動き、動物の行動パターンからの類推によって、天気変化を知る手がかりとした。なお、8番目と9番目は、愛嬌であろう。

〈事例〉

1. 朝、鳶が上空を舞えば、雨が降る。
2. 朝雷は隣歩きするな。大雨が降る。
3. 月が傘をさすと、雨が近い。
4. 猫が顔を洗うとき、明日は晴れ。
5. 百舌鳥の高鳴きは、晴れ。
6. 夕方、ぶとが群れているときには、雨になる。
7. 蜂が低いところに巣を懸けるときには、大風が吹く。高い所に懸けるときには、大雨が降る。
8. 下駄を投げて、表が出れば天気、裏が出れば雨。
9. 昼からの雨と、年寄りのジョウシキ(強情)はやまない。
10. 夕立、三日。
11. 夏の夕焼け河渡れ、秋の夕焼け鎌を研げ。
12. ヤジクラ(青大将)が這い出ると、雨。
13. 遠くの山が近くに見えると雨が近い。
14. 夜上がりの雨は長続きしない。
15. 彦山が黒くなっても曇っても雨が降らない。(彦黒雨無し)
16. 霜が早く消えると、霜上げする。
17. 羽釜の尻に火が点くと、明日は晴。　（『犀川町誌』1068－1070頁をもとに、再調査）

②縁起

この一連の諺は、すべて「富の盛衰」と関連させて理解すべきであるまいか。それゆえに地域内の富の盛衰が「一定量の富の増減」という民俗的認識と密接な関連があると仮定させて考え見ることである。すなわち屋敷内の「白蛇」の移動が富の移動と無関係ではないと推論してみることである。

〈事例〉

1. 一富士、二鷹、三茄子、四葬式、五棟上げ
2. 朝蜘蛛は縁起がよいが、夜の蜘蛛は親に似ても殺せ。
3. 家に白蛇がいると、金持ちになる。
4. 葬式の夢を見ると、良いことがある。

5. 家を出るときに、鼻緒が切れると凶。
6. 木と竹の箸の組み合わせは、マンが悪い。
7. 鳥が家に飛び込むと、マンが良い。
8. 烏鳴きが悪いと、死人が出る。
9. 朝、お茶に茶柱が立つと、マンがよい。
10. お産のある年の元旦に、一番に男がくると男児、女がくると女児が産まれる。
11. 雨枇杷、日梅。
12. 犬の遠鳴きは縁起が悪い。
13. 朝は右、晩に左の耳がかゆいと、誰かが悪口を言っている。
14. 蜘蛛が下がると、お客がくる。
15. 蜘蛛が足を広げて下がると、お客はあるが土産はない。

（『犀川町誌』1068－1070頁をもとに、再調査）

③禁忌

人々の習慣化された生活道徳・倫理を示すものが、次の諺であるまいか。したがって集団全体への秩序維持のための法的規則と言うよりも、個人が守るべきエチケットと見るべきである。濃密な人間関係が形成されるだけに、地域において共存共栄生活するための指針である。

〈事例〉

1. ご飯を食べてすぐに寝ると、牛になる。
2. ミミズに小便をかけると、腫れる。
3. 敷居を踏むと、親父の額を踏むのと同じ。
4. 足袋を履いて寝ると、親の死に目に会えない。
5. 三隣亡に家を建てると悪い。
6. 友引に葬式をすると悪い。
7. 寅と八日に物を断つな、袖に涙の絶え間がない。
8. 午後に裁つと、命は短い。
9. 葬式の帰りに、他人の家に立ち寄るな。
10. 結納は午前中にすること。
11. 山椒の実を採るとき、歌を歌うと木が枯れる。
12. ゲジゲジが頭を這うと頭が禿げる。
13. 九餅は搗くな。
14. 盆の十六日は殺生するな。盆の十六日は地獄の釜も蓋もあき、餓鬼の苦も逃れる。
15. 漬物を一切れや三切れつけるものではない。
16. 臍のゴマを取ると腹がせく。
17. 四十九日が三ヶ月にまたがるのは良くない。
18. 四十九日がすぎるまでお宮の鳥居をくぐってはならない。
19. 着物を左前に着ると縁起が悪い。

20. 新しい履き物を座敷から履き下ろしてはならない。
21. 朝の出針を使ってはいけない。
22. 秋茄子は嫁に食わすな。
23. ミョウガを食べると物忘れをする。
24. ご飯に箸を立ててはいけない。
25. 木と竹の箸を一緒に使ってはいけない。
26. 食事の時箸から箸へ物を渡してはならない。
27. 畳の縁を踏んではいけない。
28. ワクド（蛙）は福の神だから、いじめてはいけない。
29. 髪の毛や爪を火にくべてはならない。
30. 北枕に寝てはいけない。

（『犀川町誌』1068－1070頁をもとに、再調査）

〔屋号〕

人に名前があるように、家を特定するための呼称に「屋号」がある。全国的には「イエナ」とも「カドナ」とも呼ばれたりするが、伊良原では「ヤゴウ」が一般的である。

そもそも屋号は、日本近世において名字を公に名乗ることのなかった農民たちの知恵が生み出したものであり、また「白川」とか「緒方」など同一な名字を持つ家が少なくない伊良原にあって、我と汝の区別をするに必要な記号ともなった。流動性の低い伊良原であるだけに、この屋号は江戸時代から今日に至る村内の歴史的記憶を伝える貴重な伝承であると言って良い。

別表に掲出した伊良原の屋号を一見して判明するように、その付け方は4種類に大別できる。

第1……家と家の系譜関係を明示化したもの：「本家」と「インキョ」（隠居＝分家）など。

第2……農業以外の職業を記号化したもの：「鍛冶屋」とか「精米所」「お医者」など。

第3……方位を記号化したもの：「出口」とか「奥」「下の小野」など。

第4……村外の移動先を記号化したもの：「アメリカ」など。

伊良原で圧倒的に多いのは、第一番目の「家と家との関係性」を物語る屋号であるが、それだけにこの屋号は、婚姻・葬礼などの冠婚葬祭における儀礼的義務や社会的慣行の遂行、生活互助組織の確認、婚姻関係を結んで良いか悪いか、公共の場所での座る場所の位置の指定、相互の親しさの表明など多様な機能を果たしている。西日本では「人名が屋号化」し、東日本では「家と家との系譜関係」を示すものが支配的であるだけに、伊良原は東日本タイプに属すると言えよう。

さて本章では、「源三郎」や「千右衛門久保」などの字名や「三ツ巴」や「橘」などの家紋などにも言及すべきであるが、字名は本書の他処で取り扱われ、家紋に関してはすでに『伊良原村史』で論じられているので、ここではその考察を割愛することとしたい。

なお、ダム建設に伴う伊良原地区水没予定家屋の写真を列挙することで、屋号と関連させて、家々の貴重な思い出を広く後生に保存・継承したいと念ずるからである。

（松原　孝俊）

表　水没地域の家屋

地区－番号	家　主	屋　号	地区－番号	家　主	屋　号
高座－1	和田秋雄	下（シモ）	東講－13	緒方正一	分家
高座－2	高田トメ	出口	東講－14	松本克己	上（ウエ）
高座－3	高尾元義（竹中先生）		東講－15	渡邉幸憲	
高座－4	高尾元義（本宅）		東講－16	下伊良原公民館	
高座－5	加藤フジヨ	先	原－1	緒方時男	サヤモト
高座－6	山下壽人	山下	原－2	緒方覚	隠居
高座－7	徳永健治		**原－3**	**緒方順年**	**石屋**
高座－8	高尾絹子	ジュウキイ	**原－4**	**緒方年一**	**母家**
広瀬－1	吉田徳行		原－5	小野スミヱ	
広瀬－2	田中ミツヱ	トナリ	原－6	緒方邦弘	宮の下
広瀬－3	高尾三美	上	原－7	緒方秀吉	隠居
広瀬－4	高尾キヨコ	下（シモ）	原－8	緒方酉夫	
広瀬－5	高尾一枝	母屋	**原－9**	**長野倶三**	**宮園谷**
広瀬－6	高尾愛子	川向こう	原－10	長野春夫	畳屋
広瀬－7	高尾昭行	前	**原－11**	**進時彦**	
広瀬－8	高尾一夫	奥	原－12	県同和会研修施設	
広瀬－9	松本俊六		原－13	行橋警察署伊良原駐在所	
広瀬－10	松本三行		原－14	加来哲也	明秀寺
西の塚－1	山田弘		原－15	森本則	
西の塚－2	山田弘		原－16	緒方重臣	岩屋
西の塚－3	熊谷康正	コネリ	原－17	緒方正己	アメリカ
西の塚－4	天手二美	隠居	浦向－1	白川俊輔	お医者
西の塚－5	緒方満壽子	サコンシタ	浦向－2	伊良原郵便局	
西の塚－6	天手安彦	本家	浦向－3	田中登美子	製材所
西の塚－7	森千治	隠居	浦向－4	白川哲夫	コウヤ
西の塚－8	**緒方寅夫**	**城山**	**浦向－5**	**加来龍男**	**ハゴヤシキ**
西の塚－9	森寛	本家	浦向－6	白川薫	下隠居
西の塚－10	高木神社		浦向－7	高田親吉	
西の塚－11	熊谷彰子（空家）		浦向－8	中山功	
東講－1	白川美代	アメリカ	浦向－9	白川七郎	中江
東講－2	**白川照子**	**御座**	浦向－10	高瀬二三昭	
東講－3	白川静夫	隠居家	浦向－11	村本由美	
東講－4	**白川正俊**	**本家**	浦向－12	伊良原小学校（町）	
東講－5	白川行夫	精米所	浦向－13	伊良原農協支所	
東講－6	**白川亘**	**元庄屋**	浦向－14	竹内隆雄	
東講－7	川下秀一	山の下	浦向－15	竹内雄二	
東講－8	白石七郎	中屋敷	浦向－16	谷マサコ	トチノキ
東講－9	園田友房	中屋敷	浦向－17	白川英俊	鳥屋
東講－10	園田利徳		浦向－18	緒方フサヱ	仕立屋
東講－11	同盟会事務所		浦向－19	やまびこ診療所（町）	
東講－12	（左）宮尾三男（右）緒方繁美（大工小屋）	（左）橋元	浦向－20	白川昌利	塚本下

※ゴチックで表示した家屋は「建造物」編に写真を掲載

地区－番号	家　主	屋　号	地区－番号	家　主	屋　号
浦向－21	森吉美	塚本中	中村－7	中川松夫	
浦向－22	神崎昭吾	川原(コウラ)	中村－8	原田強	ジョウゲ
浦向－23	**山下トメ**		中村－9	進一二三	下
浦向－24	光橋ミサコ	トチノキ	中村－10	進勝美	隠居(上)
岩屋河内－1	山下忠勝		中村－11	森下明	上
岩屋河内－2	加来照夫	ワタリ	中村－12	森下久	下
岩屋河内－3	山村信弘	龍屋	中村－13	森下公直	
岩屋河内－4	武吉(空家)		中村－14	原田眞澄	
岩屋河内－5	小野勲	下の小野	中村－15	原田浩司	セジマ
岩屋河内－6	小野昭治	局長	中村－16	須田チヨコ	
岩屋河内－7	加来冨藏	ワタリ	中村－17	福岡卓宏	松屋(マツヤ)
中村－1	原田勇雄		中村－18	伊良原役場支所・伊良原保育園	
中村－2	教員住宅(町)		中村－19	校長住宅(町)	
中村－3	中原季雄	シマヤ	中村－20	高木神社(藤の宮)	
中村－4	松本角吉		中村－21	中川政吉	宮の上
中村－5	**中川辰雄**	**川坂**	中村－22	郡山和一	
中村－6	**中川俊明**	**アメヤ(飴屋)**	中村－23	原田恒美	坂(サカ)

※ゴチックで表示した家屋は「建造物」編に写真を掲載

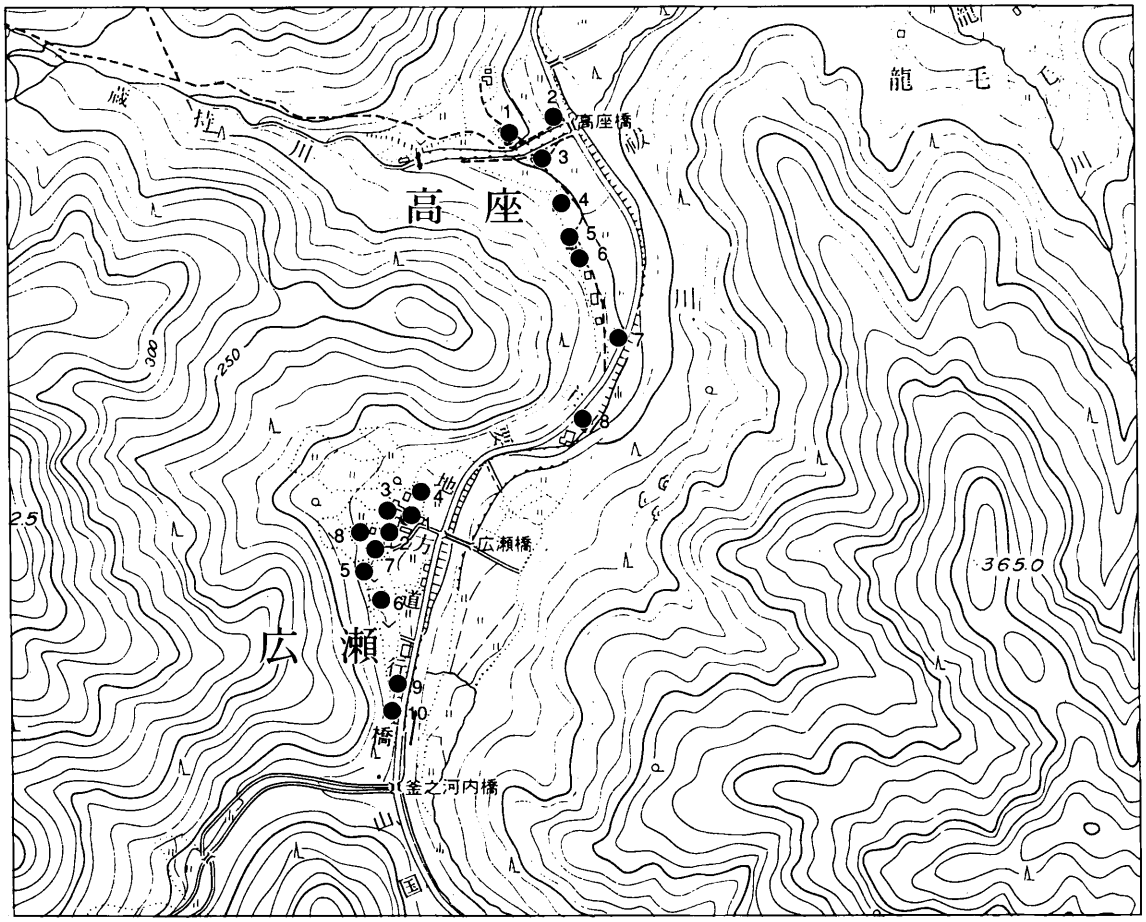
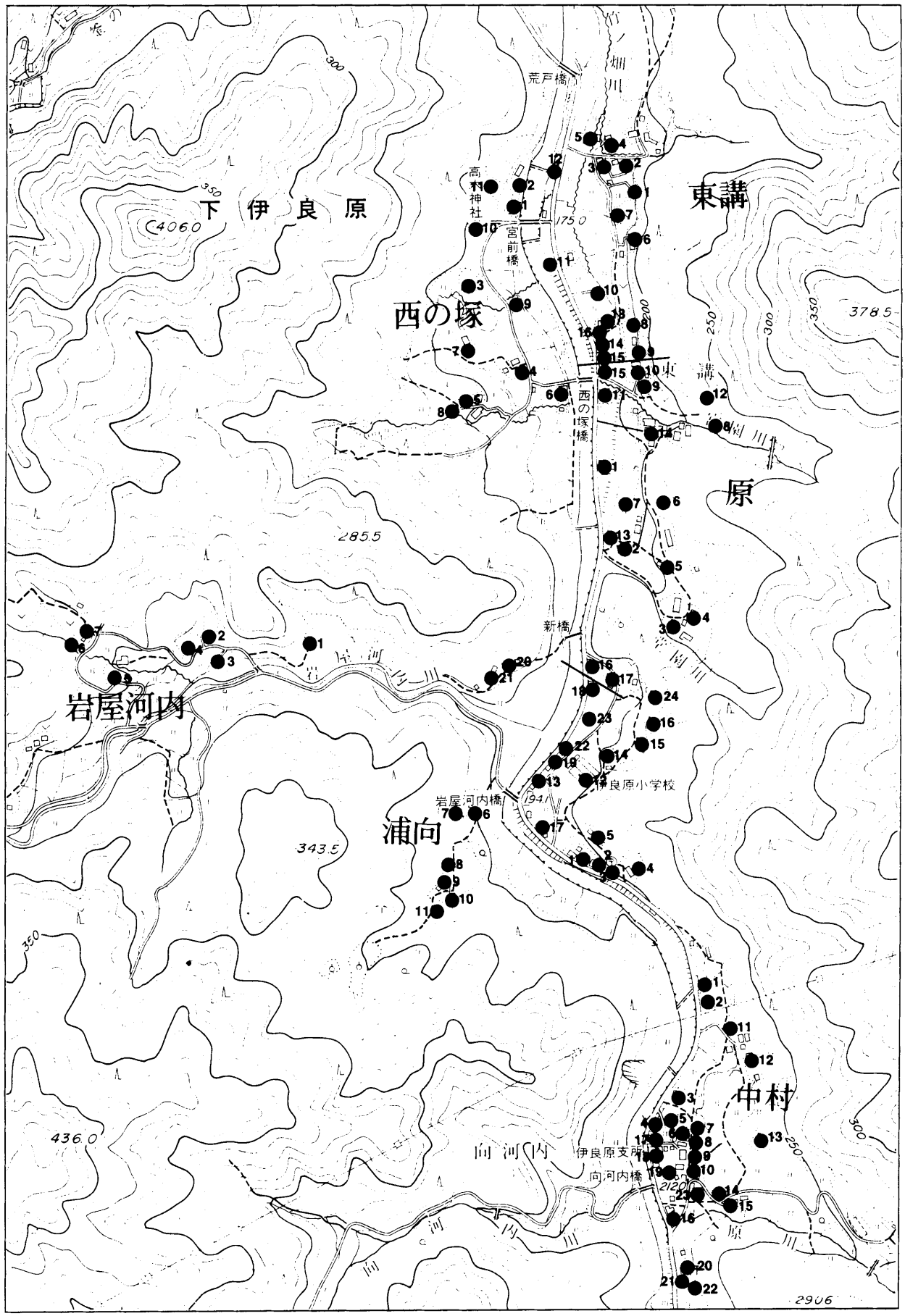


図1　水没地区の家屋分布図1 (1/10.000)



※図2　水没地区の家屋分布図2（1/10.000）

高座ー1　和田秋雄家

高座ー2　高田トメ家

高座ー3　高尾元義家（竹中先生）

高座ー4　高尾元義家（本宅）

高座ー5　加藤フジヨ家

高座ー6　山下壽人家

高座ー7　徳永健治家

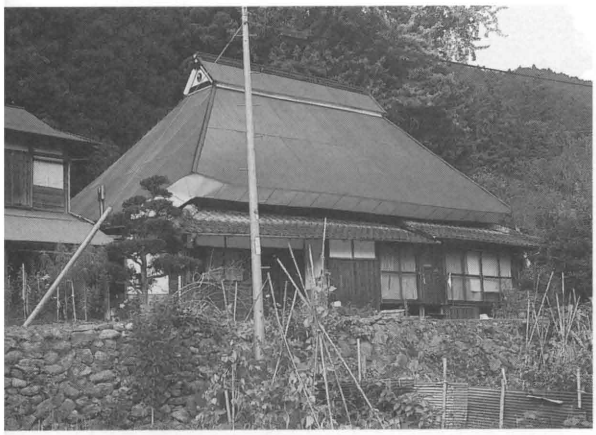
高座ー8　高尾絹子家

広瀬ー1　吉田徳行家

広瀬ー2　田中ミツヱ家

広瀬ー3　高尾三美家

広瀬ー4　高尾キヨ子家



広瀬ー5　高尾一枝家

広瀬ー6　高尾愛子家

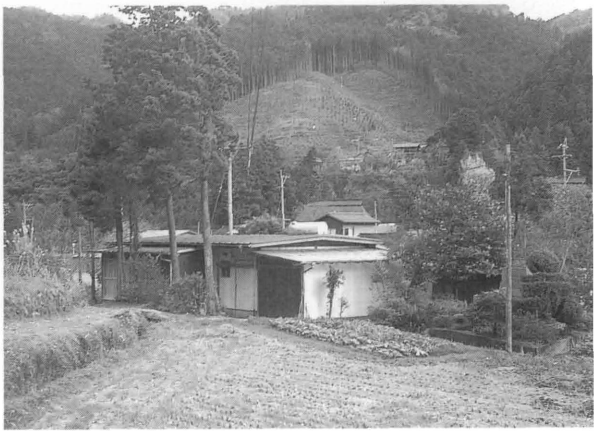
広瀬ー7　高尾昭行家

広瀬ー8　高尾一夫家

広瀬ー9　松本俊六家

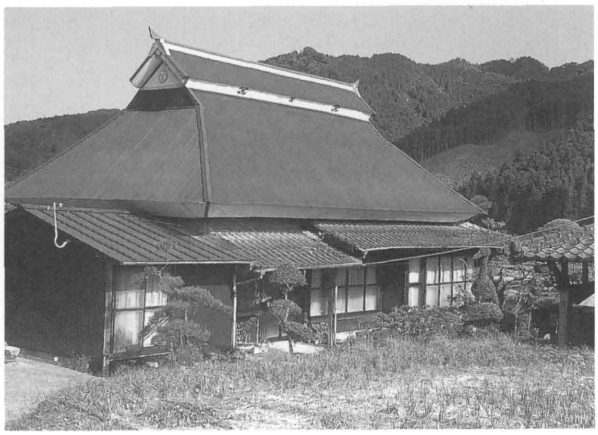
広瀬ー10　松本三行家

西の塚ー1　山田　弘家



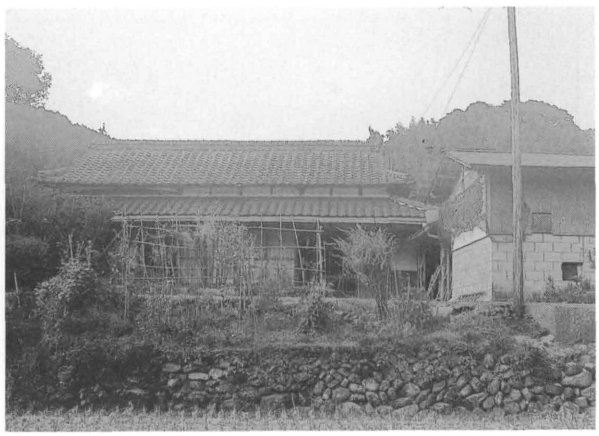
西の塚ー2　山田　弘家

西の塚ー3　熊谷康正家



西の塚ー4　天手二美家

西の塚ー5　緒方満壽子家



西の塚ー6　天手安彦家

西の塚ー7　森　千治家

西の塚ー9　森　寛家

西の塚ー10　高木神社

西の塚ー11　熊谷彰子家(空家)

東講ー1　白川美代家

東講ー3　白川静夫家

東講ー5　白川行夫家

東講ー7　川下秀一家

東講ー8　白石七郎家

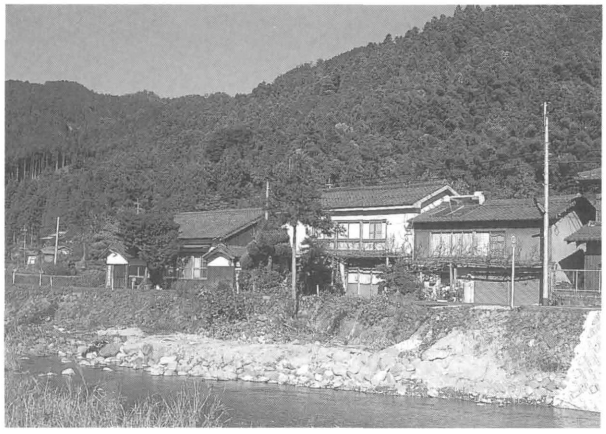
東講ー9　園田友房家

東講ー10　園田利徳家

東講ー11　同盟会事務所

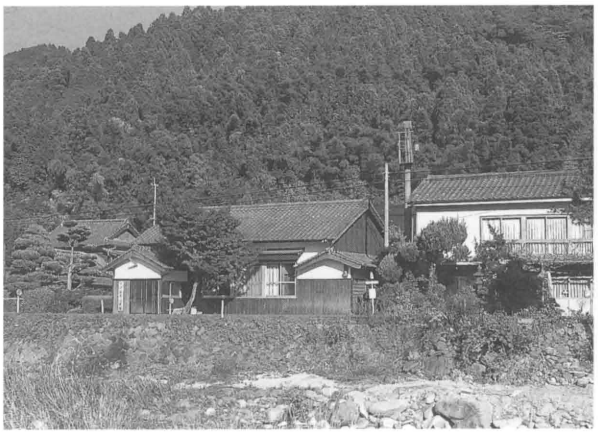
東講ー12　(左)宮尾三郎家・(右)緒方繁美家(大工小屋)

東講ー13　緒方正一家



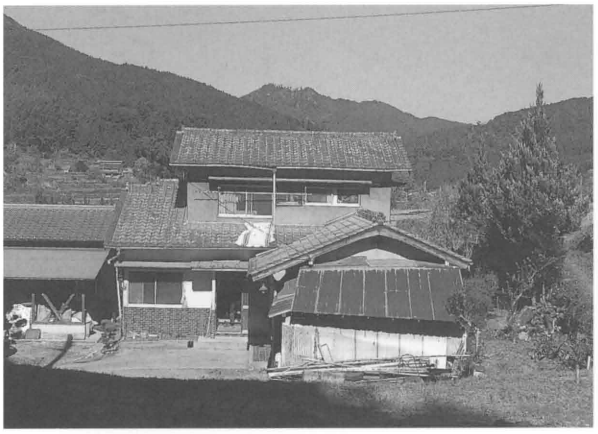
東講ー14　松本克己家

東講ー15　渡邉幸憲家



東講－16　下伊良原公民館

原－1　緒方時男家



原－2　緒方　覚家

原－5　小野スミヱ家

原－6　緒方邦弘家

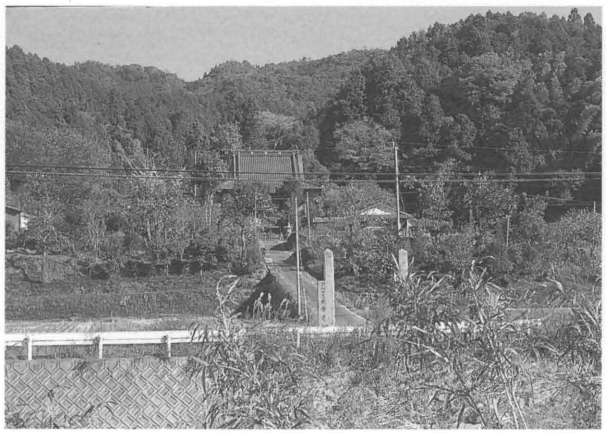
原－7　緒方秀吉家

原－8　緒方酉夫家

原－10　長野春夫家

原－12　県同和会研修施設

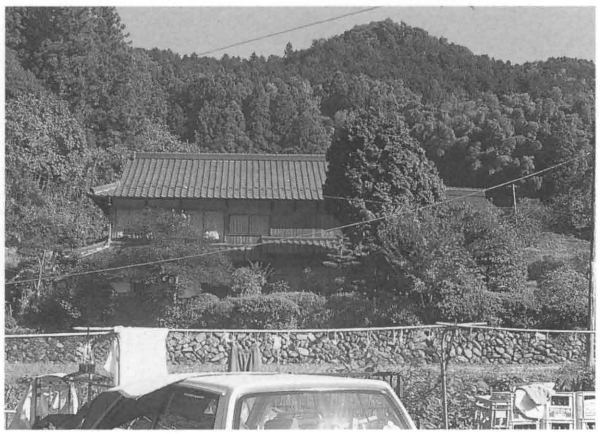
原－13　行橋警察署伊良原駐在所



原－14　加来哲也家

原－15　森　本則家

原－16　緒方重臣家



原－17　緒方正己家

浦向－1　白川俊輔家

浦向－2　伊良原郵便局

浦向ー3　田中登美子家

浦向ー4　白川哲男家

浦向ー6　白川　薫家

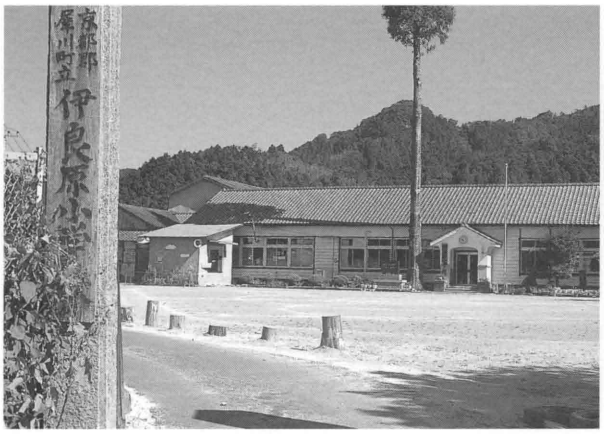
浦向ー7　高田親吉家

浦向ー8　中山　功家

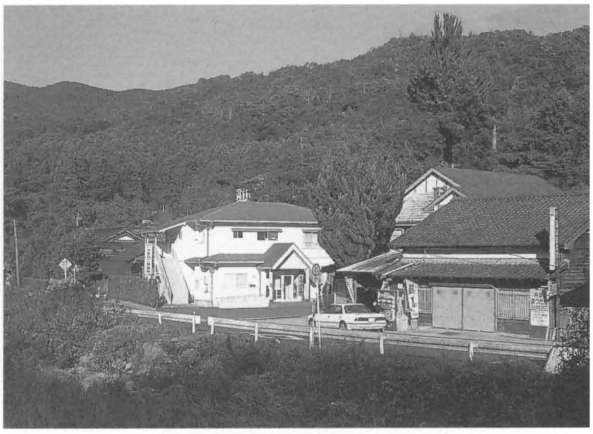
浦向ー9　白川七郎家

浦向ー10　高瀬二三昭家

浦向ー11　村本由美家

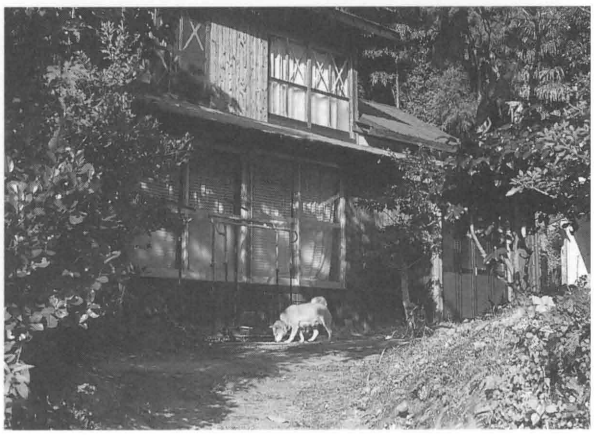


浦向ー12　伊良原小学校（町）



浦向ー13　伊良原農協支所

浦向ー14　竹内隆雄家

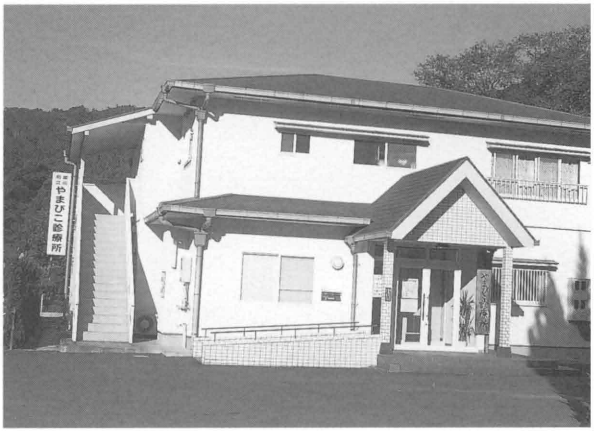


浦向ー15　竹内雄二家

浦向ー16　谷マサコ家

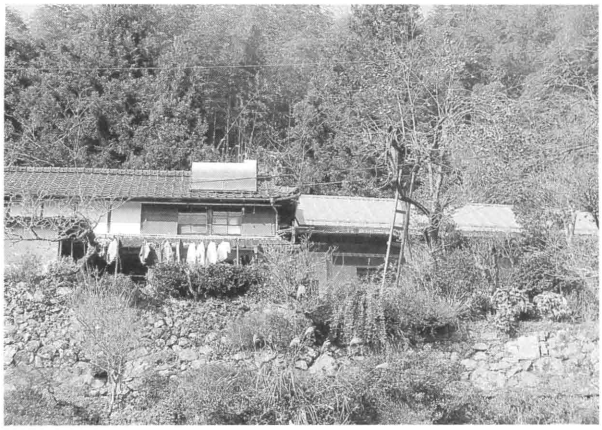
浦向ー17　白川英俊家

浦向ー18　緒方フサヱ家

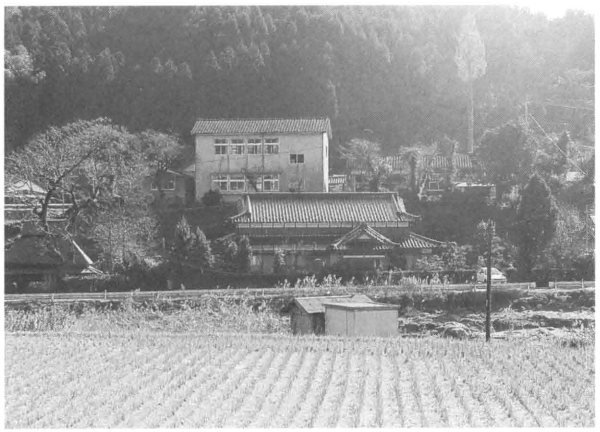


浦向ー19　やまびこ診療所（町）

浦向ー20　白川昌利家



浦向ー21　森　吉美家



浦向ー22　神崎昭吾家

浦向ー24　光橋ミサコ家

岩屋河内ー1　山下忠勝家

岩屋河内ー2　加来照夫家

岩屋河内ー3　山村信弘家

岩屋河内ー4　武吉家（空家）

岩屋河内－5　小野　勲家

中村－6　小野昭治家

岩屋河内－7　加来冨藏家

中村－1　原田勇雄家

中村－2　教員住宅(町)

中村－3　中原季雄家

中村－4　松本角吉家

中村－7　中川松夫家

中村－8　原田　強家

中村－9　進一二三家

中村－10　進　勝美家

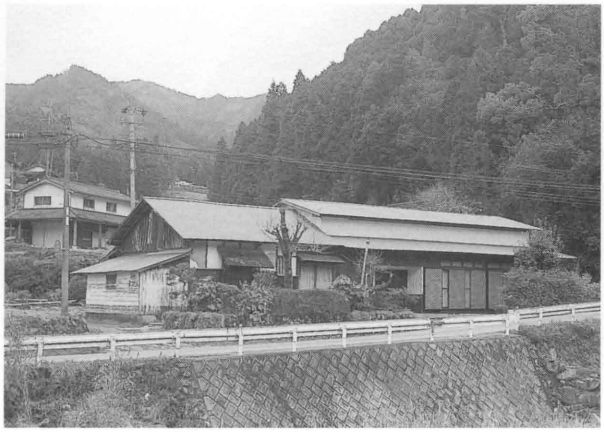
中村－11　森下　明家

中村－12　森下　久家

中村－13　森下公直家

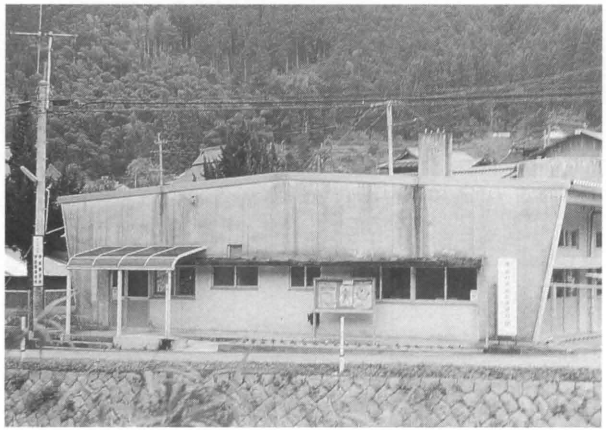
中村－14　原田眞澄家

中村－15　原田浩司家



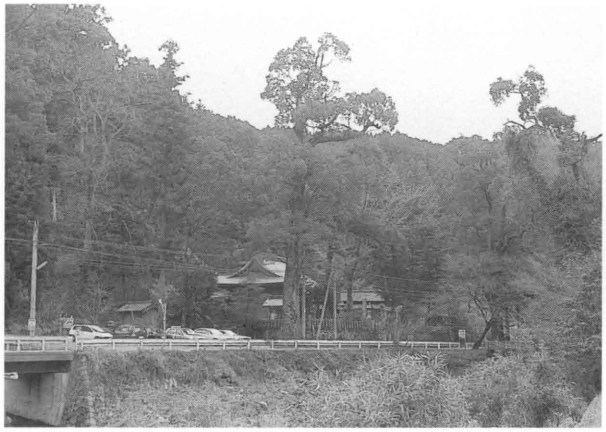
中村－16　須田チヨコ家

中村－17　福岡卓宏家



中村－18　伊良原役場支所・保育園

中村－19　校長住宅（町）



中村－20　高木神社（藤の宮）

中村－21　中川政吉家

中村－22　郡山和一家

中村－23　原田恒美家